

権理（利）

人を取り扱うにあたっては、その相手によって扱い方も変わってくるものなのだ。人民と政府との間柄は、もともとは同一のものである。ただし、その社会的役割を区別して、政府は人民の代表となって法律を整備して、人民はこの法律を守ろうと約束した。

いま、この明治の日本にいる者は、いまの時代の法律にしたがうと約束をしたのである。ひとたび国の法律と定まったことは、個人のために不便があったとしても、正式な改正の手順を踏まずには、これを変えることはできない。気をつけてこの法律を守るべきである。これは人民の責任である。

しかし、学問がなく、物の道理も知らず、食って寝るしか芸がない人間がいる。**無学のくせに欲は深くて、ぬけぬけと人をだまして、法律逃れをする人間がいる。**国の法律がどのようなものかということも知らず、自分の仕事の責任というものも果たさず、子どもは生むけれども、その子どもをきちんと教育するというやり方も知らない。

わが日本でも、今日の状態では、西洋諸国の豊かさ強さにはおよばないところもあるけれども、一国の権理ということでは、少しも違いはない。道理に背いた非道なことをされた場合には、**世界中を敵に回しても恐れることはない。**初編でも述べたように「日本国中のみなが命を投げ出しても国の威厳を保つ」というのはこの場合のことだ。

イギリス人はイギリスを自分の国と思い、日本人は日本を自分の国だと思う。自分の国の土地は、他国のものではなく、自分の国の人間のものなのだから、自分の国を思うことは自分の家を思うようにして、国のためには財産だけでなく、**命を投げ出しても惜しむに足らない。**これが、つまり「**報国の大義**」である。

この立派な人物が、政府に集まって政治をすると、その実際の政策には賛成しかねるものが非常に多く、また、誠実な良民の方も、政府に対してはたちまち卑屈になって、ごまかしを駆使して、役人をあざむいて、しかも恥じるところがない。

この立派な人物にしてこのような政治をし、この民にしてこのように卑しくなるのはなぜか。まるで、一人のうちに二つの人格があるようではないか。**個人的には賢いものの、官としては愚か。ひとりひとりのときは賢明だが、集まると暗愚。**政府はたくさんの智者を集めて、ひとりの愚人がやるようなことをやっている。おかしいではないか。

つまるところ、**その原因は、「気風」**というものに縛られて、人々がそれぞれしっかりと個人としての働きをしてこなかったことによるのではないか。明治維新以来、政府が、学術・法律・経済などの道を興そうとしても効果がなかった、その痛の原因はここにあったのだろう。

勉強中の青年が数冊の本を読めば、すぐさま官への道を目指す。金儲けを志す商人に、いくらかの元手があれば、すぐさま政府関連の商売をしようとする。学校も官許。説教も官許。牧牛も官許。養蚕も官許。民間の事業のうち十に七、八までは官に関係している。

このおかげで世間の人の心は、ますますその習慣に染まっていき、官を慕い、官を頼み、官を恐れ、官にへつらい、ちっとも**独立の気概**を示そうとするものがない。その醜態は見るに耐えない。

働き以上の利益をむさぼるのは、**君子のやることではない。**

たとえ一人が殺されたとしても、これを恐れることなく、また次の人間が代わって訴え出て、殺されるたびにまた訴え、四十七人の家来が道理を通して訴えて、命を失い尽くすに至っては、いかにひどい政府でも最後には、必ずその道理に屈して、上野介にも刑を加えて裁判を正しくすることだろう。

学校に入って勉強する費用は、一年間で百円にすぎない。三年間で三百円の資本を使い、それで一月五十円から七十円の利益を得るとというのが、洋学を学ぶ学生の商売である。耳学問だけで役人になるものは、この三百円の資本金も要らないのだから、月給はまるまる手取りの利益になる。世間の商売の中で、これだけの割合の利益を得るものがほかにあるだろうか。高利貸と言えども、これにはおよぶまい。

学問本来の趣旨は、ただ読書にあるのではない。精神の働きにある。この働きを活用して実施に移すには、さまざまな工夫が必要になる。「ヲブセルウェーション (Observation)」とは、物事を「観察」することである。「リーゾニング (reasoning)」とは、物事の道理を「推理」して、自分の意見を立てることである。

もちろん、学問の手段はこの二つで尽くされている、というわけではない。なお、このほかに、本を読まなくてはならない。本を書かなくてはならない。人と議論しなくてはならない。人に向かって、自分の考えを説明しなくてはならない。これらの方法を使い尽くして、はじめて学問をやっている人といえるのだ。

すなわち、観察し、推理し、読書をして知見を持ち、議論をすることで知見を交換し、本を書き演説することで、その知見を広める手段とするのだ。この中には自分ひとりだけでできることもあるけれども、議論や演説に至っては、他人を必要とする。演説会の意義が、これらのことによってもわかる。

いま、わが国民において最も心配なことは、その見識が低いことである。これを指導して高いレベルにもっていくのは、もちろん、学者の責任である。その手段を認識しているのであれば、力を尽くしてこの仕事をやらなくてはならない。

「10年前に計画していたことは、もうすでにやり終わったたよ」というような者に至っては、いまだお目にかかったことがない。

ただ流れに任せて

生きているだけで、かつて自分自身の有様を反省したこともなく、「生まれていままでも自分は何事をなしたか、いまは何事をなしているか、今後は何事をなすべきか」と、自身の点検をしなかったことによる。

解説

今回現代語訳するにあたっては、「**権理**」という言葉が随所にありました。普通は「**権利**」と書くわけですが、**right** という言葉を訳すのであれば、福澤が使っている「**権理**」の方が「きちんとした理が通っている」という元の意味を正しく反映しているように感じました。

「**権利**」ですと、「自分の利益ばかり主張すること」といったように、個人のわがままといったニュアンスを含んでしまいがちですが、本来はそのようなものではないはずです。いわば天から与えられ当然持っているべきものであって、主張しても何ら恥じることはなく。例えば、基本的人権というのは「**権利**」ですが、その「**利**」は利益の「**利**」ではなく「**理 (ことわり)**」です。漢字一文字が違うだけで、私たちの認識が随分と変わってしまう。

文字というものは、非常に大きな影響を与えるものだと痛感しました。「権理」の二又字は福澤の思想の根幹をなすものなので、これをきっかけにこの字を使うようになってほしいという願いを込めて、一貫してこの文字を用いました。

論理的であることが、今の世の中では求められています。福澤は極めて論理的でありながら、それ以上の力を持っていました。それを「筋力(すじりよく)」と呼んでいるのですが、本筋を見つけてきちんと通していく力が彼にはありました。筋を間違ったならば、その後どんな緻密な論理を積み重ねたとしても、大した意味を成さないのです。

福澤諭吉は学問をした人というだけではなくて、経済人として大成功を収めた人でもあります。そもそも大学、塾を一つのビジネスモデルとして確立し、授業料を納めるように定めたのも福澤の功績です。